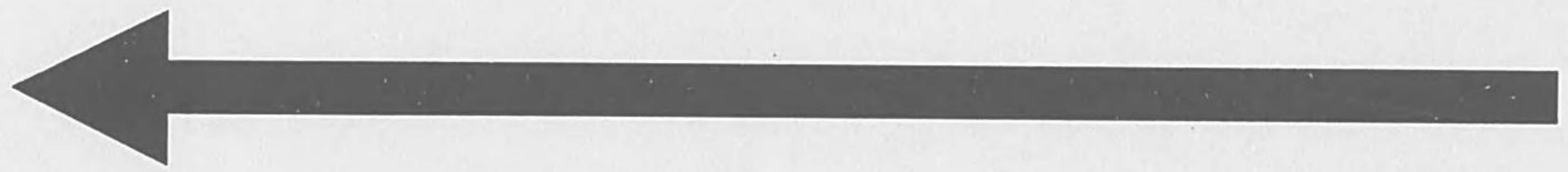


始



8
222

旅子

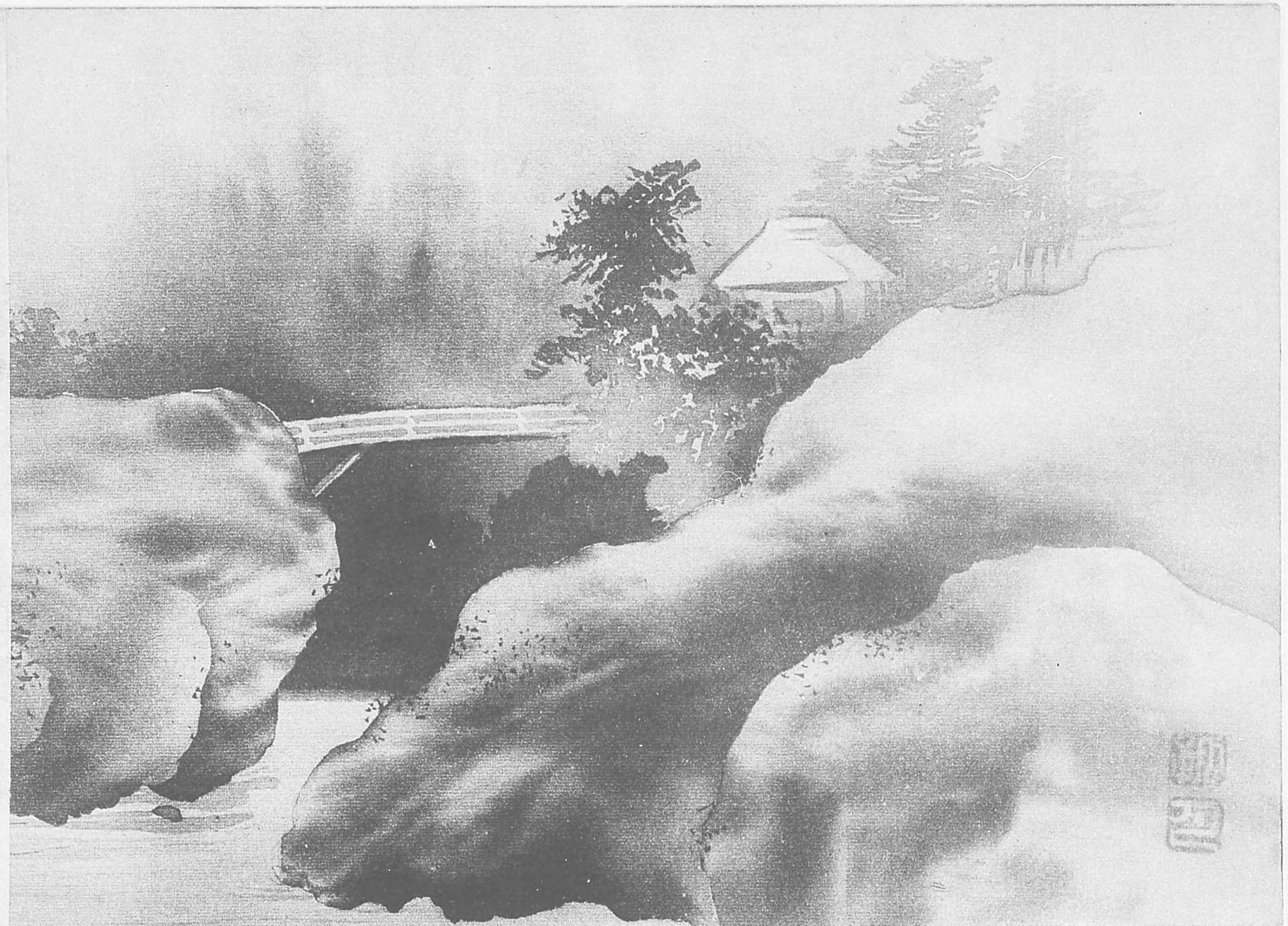
家

土産

塔原

の巻





御印

落葉の里の春風

山を渡る



静かなる

高き下へて世間の塵を

アザシ小淵の春風の音

せ響きの嵐は山並に

流るる曲りて山廻りて

關谷より塵を去る

關谷の川

關谷 箒川

關谷より鹽原までの道
路風曲して山腰をめぐ
り懸崖の屏風は引並べ
て俗境を隔て箒川の清
流音すみて世間の塵を
掃ひ去れり



はきためし
落葉も見えず箒川



塩原稚子が淵

深き思ひに沈みてうれ
しき瀬を見ずといはゞ
いまはしき様なれど縁
かはらぬ松の色をうつ
せるけしき千代とここ
はの淵とながむればい
とめでたし



鹽原稚子も淵こ洞門

白玉はありとも

たれかかづくべき

此岩ふちの

底ひなければ 春海

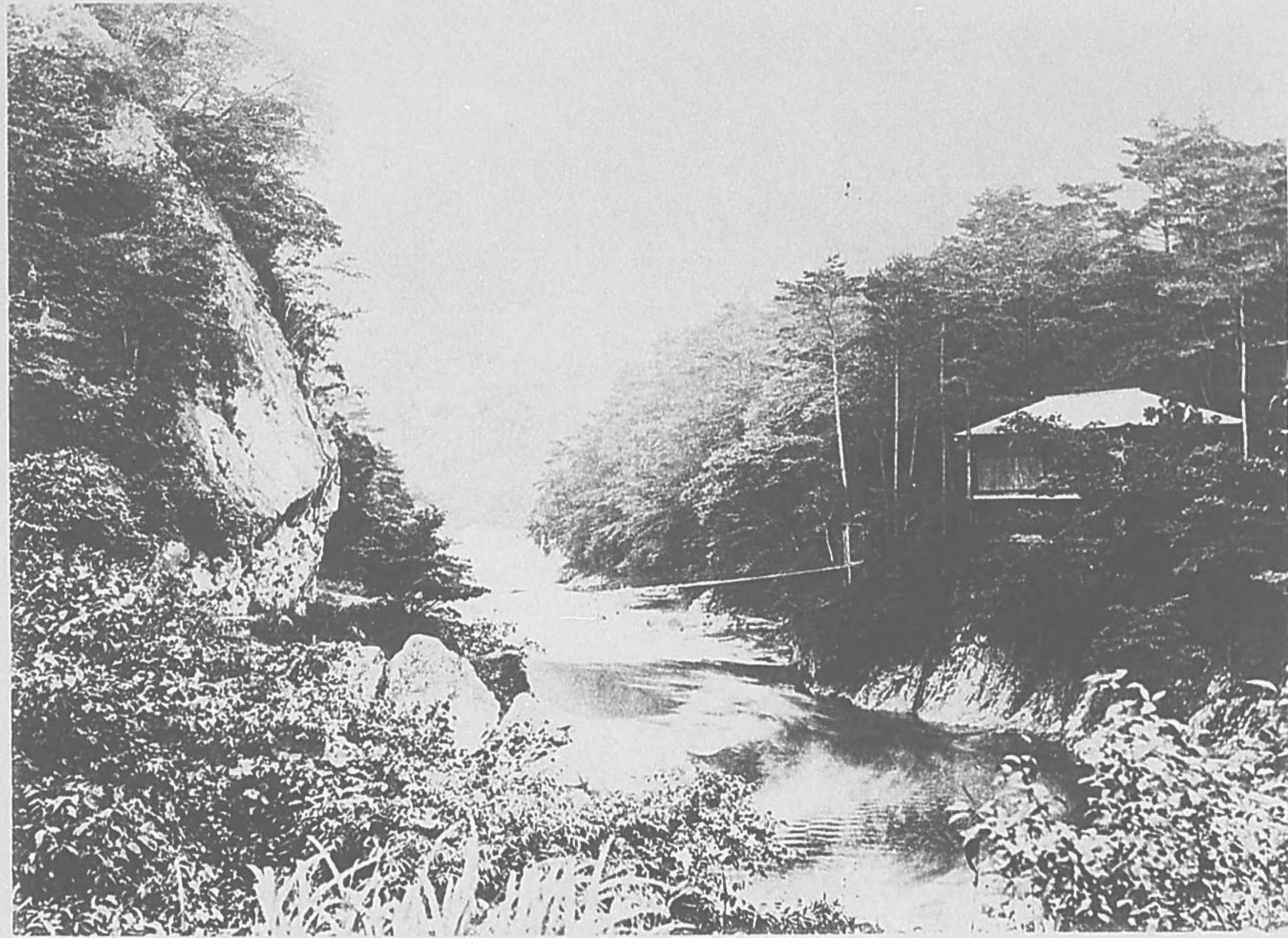


洞くぐる鳥の

ゆくへや夏木立

堂中





鹽原福渡戸

演劇に全盛を残せし高

尾講談に勉強を傳へし

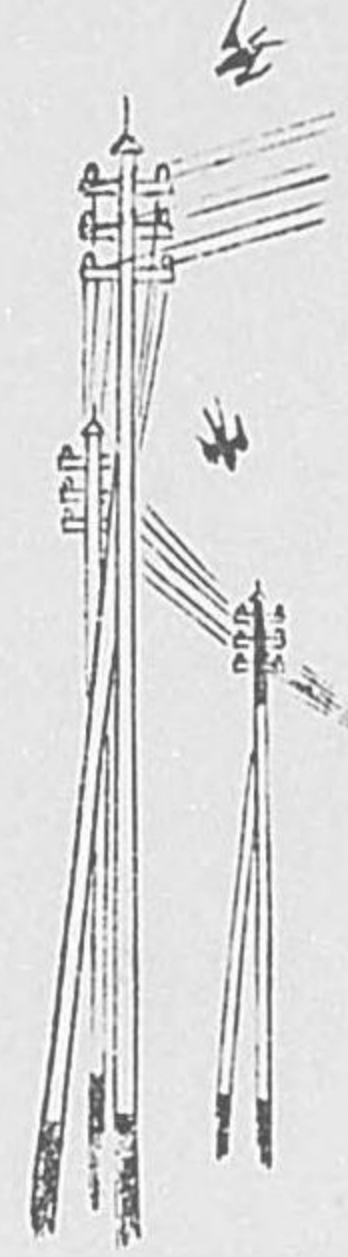
なりミか温泉風景また

太助など皆此鹽原の人

名高く福渡戸には浴客

を待ち受くる旅館十數

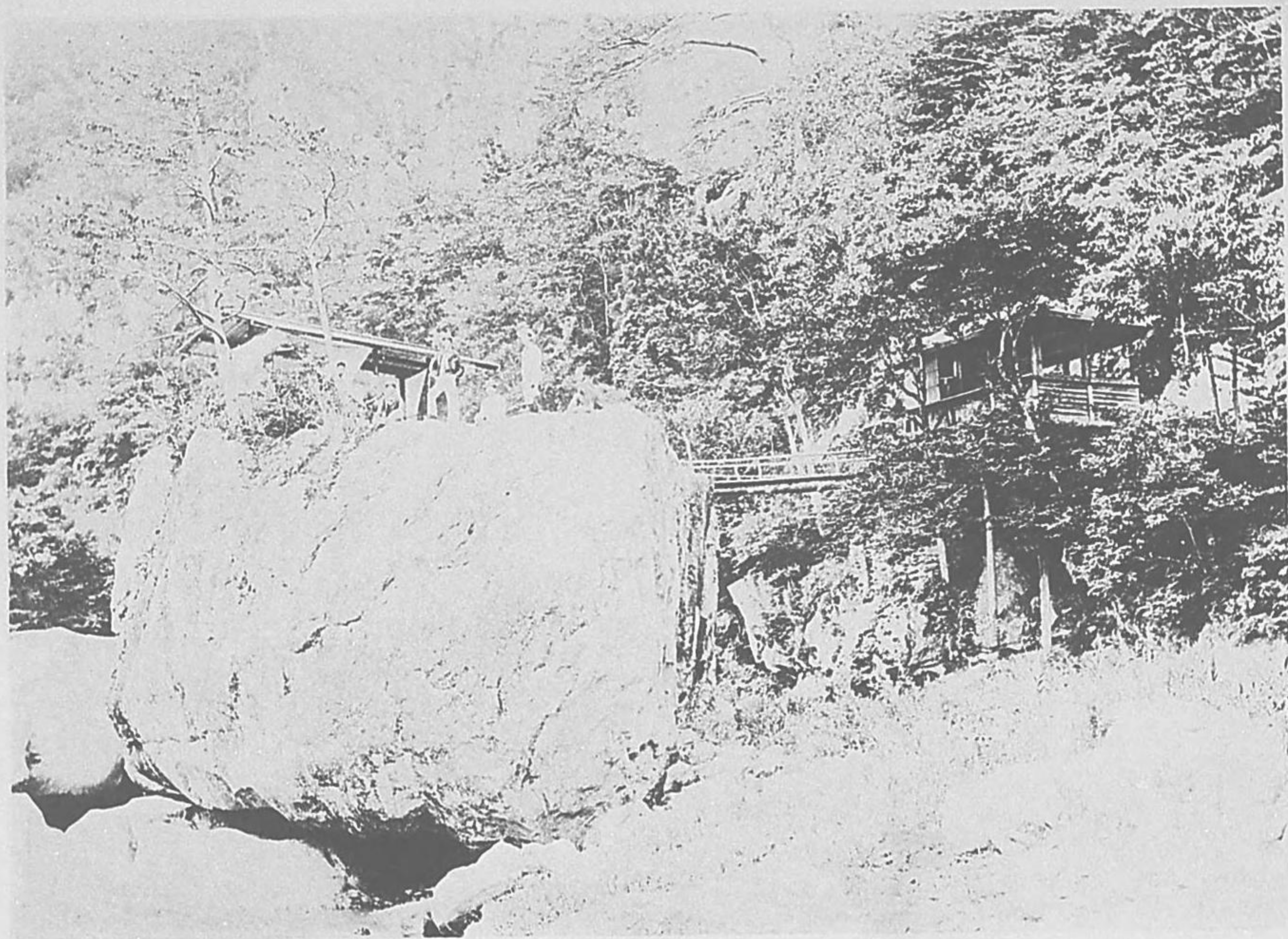
軒あり

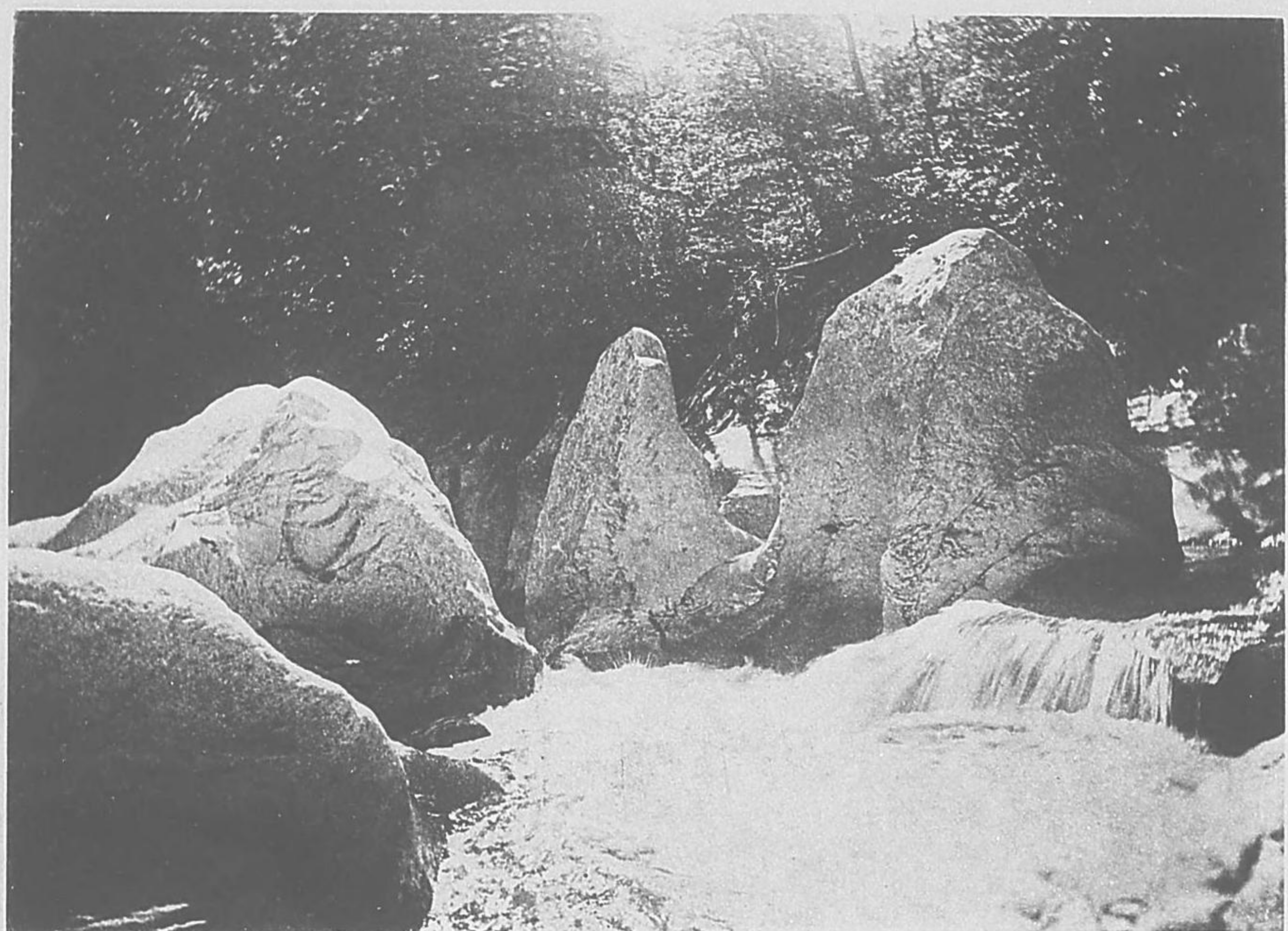


塩原野立石



蒲生氏郷此所に野立せしより名づくといふ野だてとは貴人旅行の時に駕輿などを立てさせて小休みする事とぞ石の高さ二丈餘面積百坪其面平かなり





塩原劔摺岩

風樹を過ぎて響を
なし水石に觸れて
聲をなすもし觸れ
ず過ぎずは耳に入

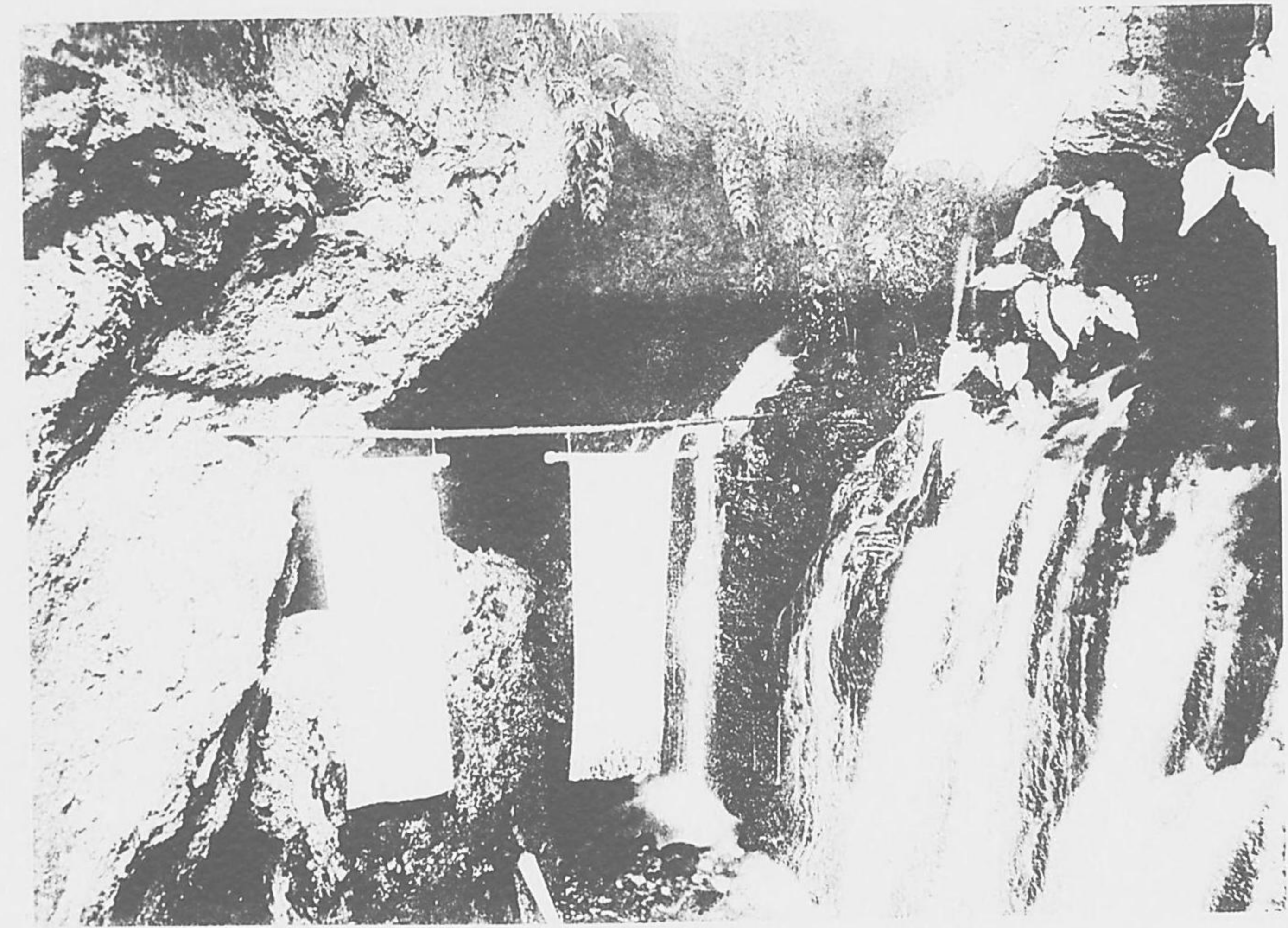
るものなからん此
聲と響とは風にあ
るか樹に有るか水に
有る乎石に有る乎



鹽原頼政洞

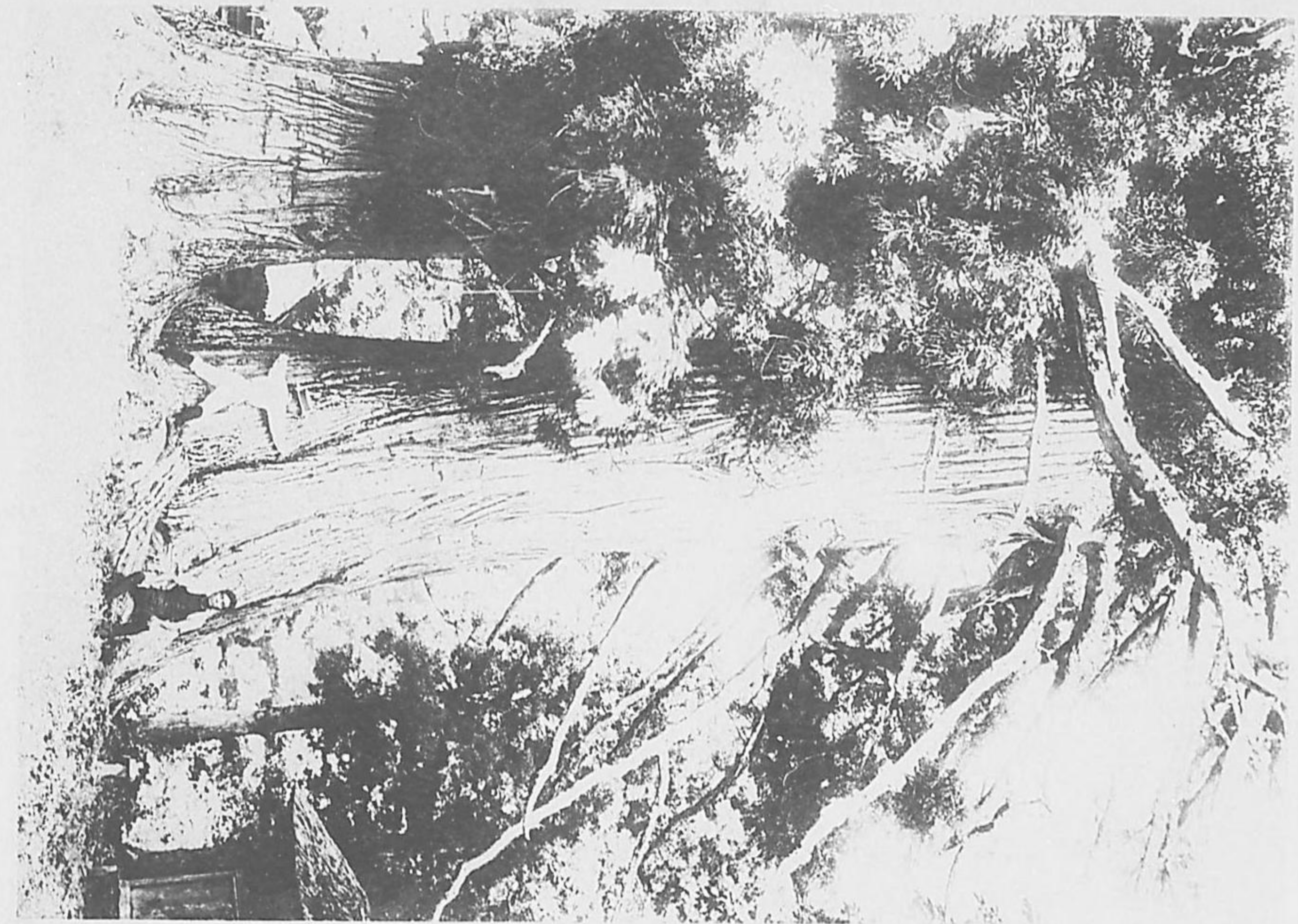


頼政の孫伊豆冠者有
綱繼原家忠に身を寄
せ鎌倉の兵と戦ひて
敗れ此洞に潜み居し
こそ源三位の事と傳
へしは誤りなるべし



鹽原逆杉

鹽原七不思議の
一なる逆杉は其枝天に向
はずして地に垂れた
り天狗は楯に居ら
で陰に栖むべく鶯は高
きにとまらずして低
きに巢を造るならん



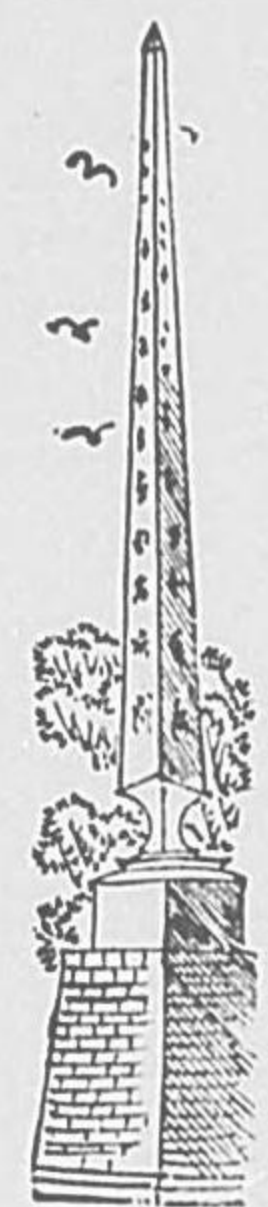
鹽原鹽湧橋遠望

氣霧山如笑

氷消溪有聲

橋上思梅立

一鳥導吾鳴



たに川の

音にまされず

かんこ鳥



塩原行動瀧



山中瀧多きために形容
の言葉譬諭の文字つか
ひ盡して二十八言三十
一字何といはんか工夫
つかずいかな李白も業
平も閉口すべし



鹽原小太郎の淵

戦々競々深淵に臨むが
如しなご机上天にて書
は講ずれど實際臨みし
事はなかりしが此地に
遊びて目前に経験した
り薄氷を踏むことは先
足を出しがたし



鹽原鹽湧橋夕照

峭壁下看春草綠深林遠

見夕陽紅泉如懸密山常

雨石似歸盤洞石風



こは泰嗣が靈巖の夕照

を詠せしなり此詩以て

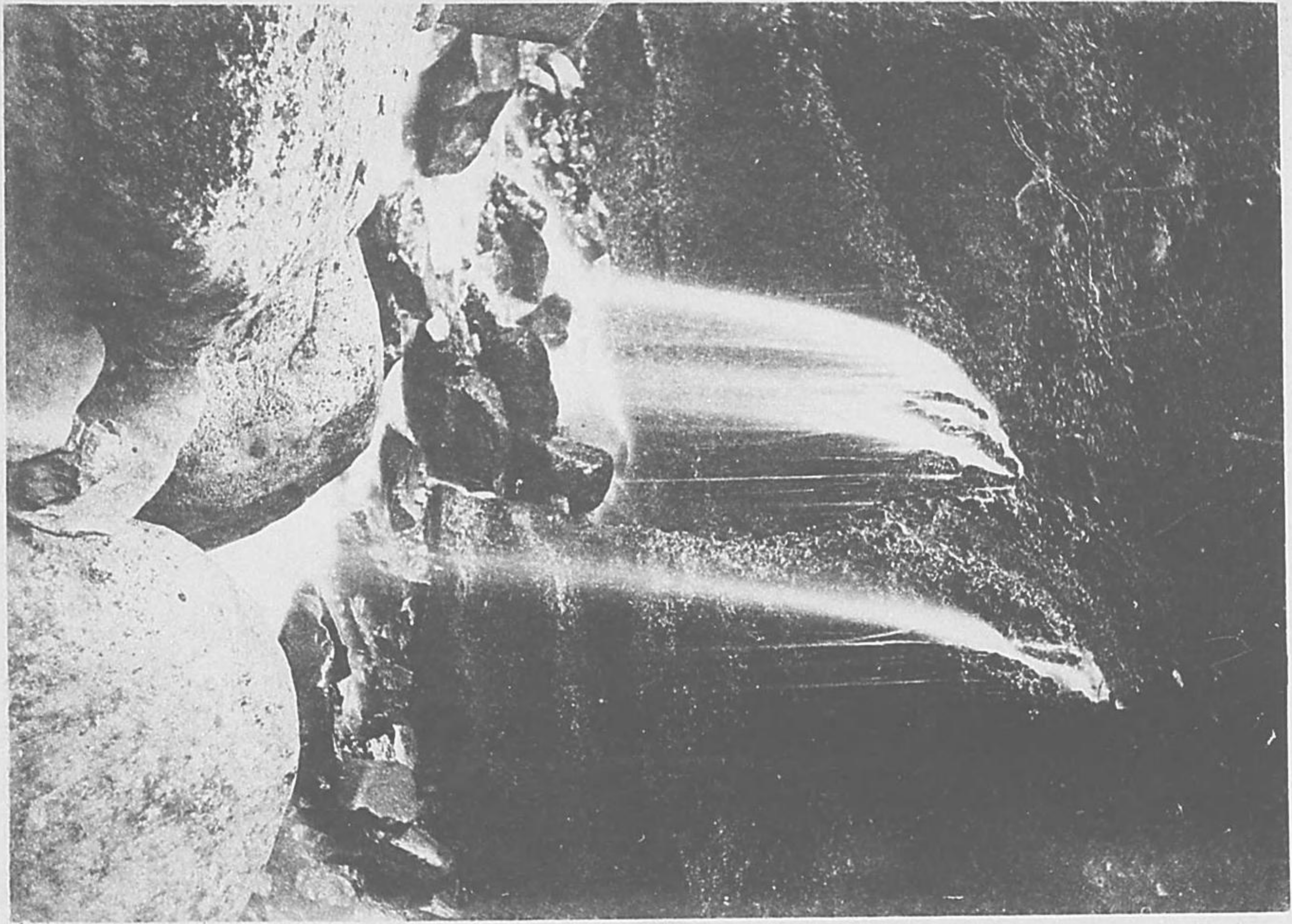
鹽湧橋に移すべし



鹽原素練瀧



紅葉のにしきは秋こ
そかさねてよけれ夏
は涼しうひみにき
て見よと此の白霜を
練りいでしは山姫の
心しらひなるべし



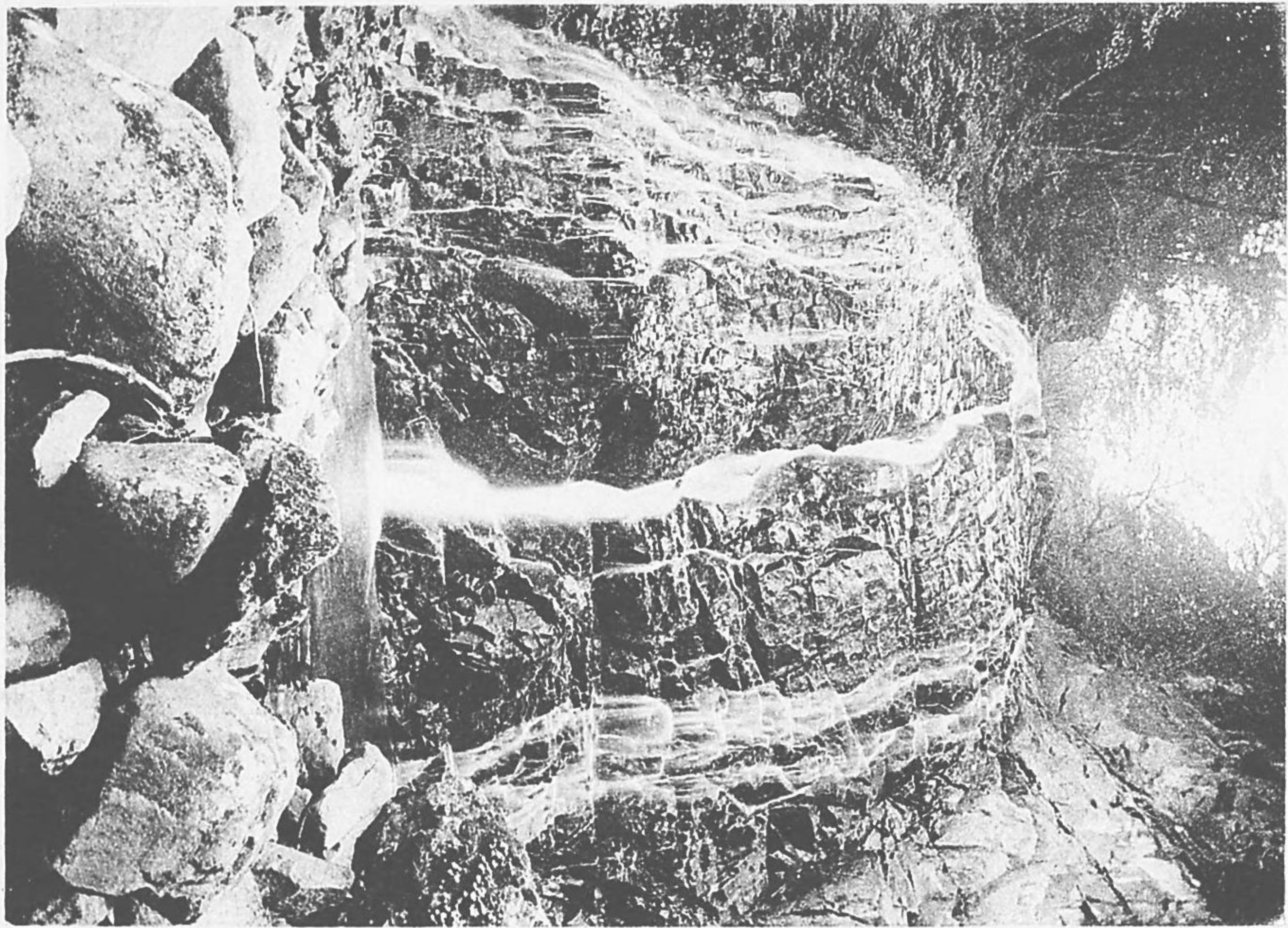
鹽原咆哮瀧

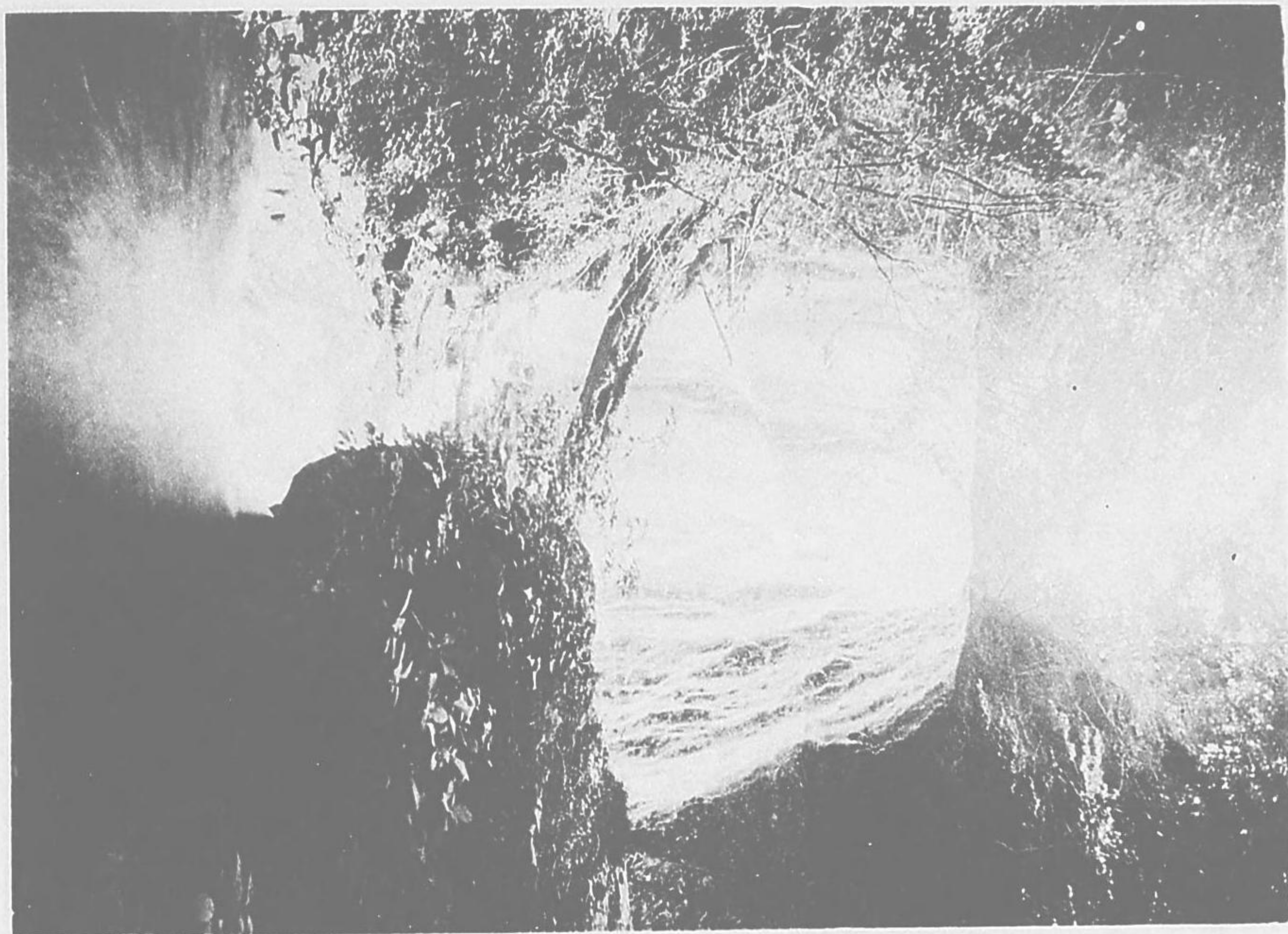
虎か豹かはた獅子か黒
毛白斑たけり狂ひてう
なり吼ゆる聲山谷に震
動せり



岩をさく

いきほひ凄し
雪風





雷
霆
瀧

電光閃かすして奔雷轟
き驟雨至らずして岩樹
潤ふ



みな月の

寒さ散らすや

たき

しぶき

塩原山中炭焼竈

あしがきの

此方かなたに

立つけふり

炭やく里の

敷ぞ見ぬける

千陸



炭賣のおのが妻

こそ黒からめ

重五



26/3/21

明治卅三年十一月廿五日印刷
(旅の家土産第三十一號)
明治卅三年十二月
十日發行
(非賣品)

發行兼印刷者
中尾新太郎

神戸市北長狭通五丁目四十六番地
光村利澤方寄留

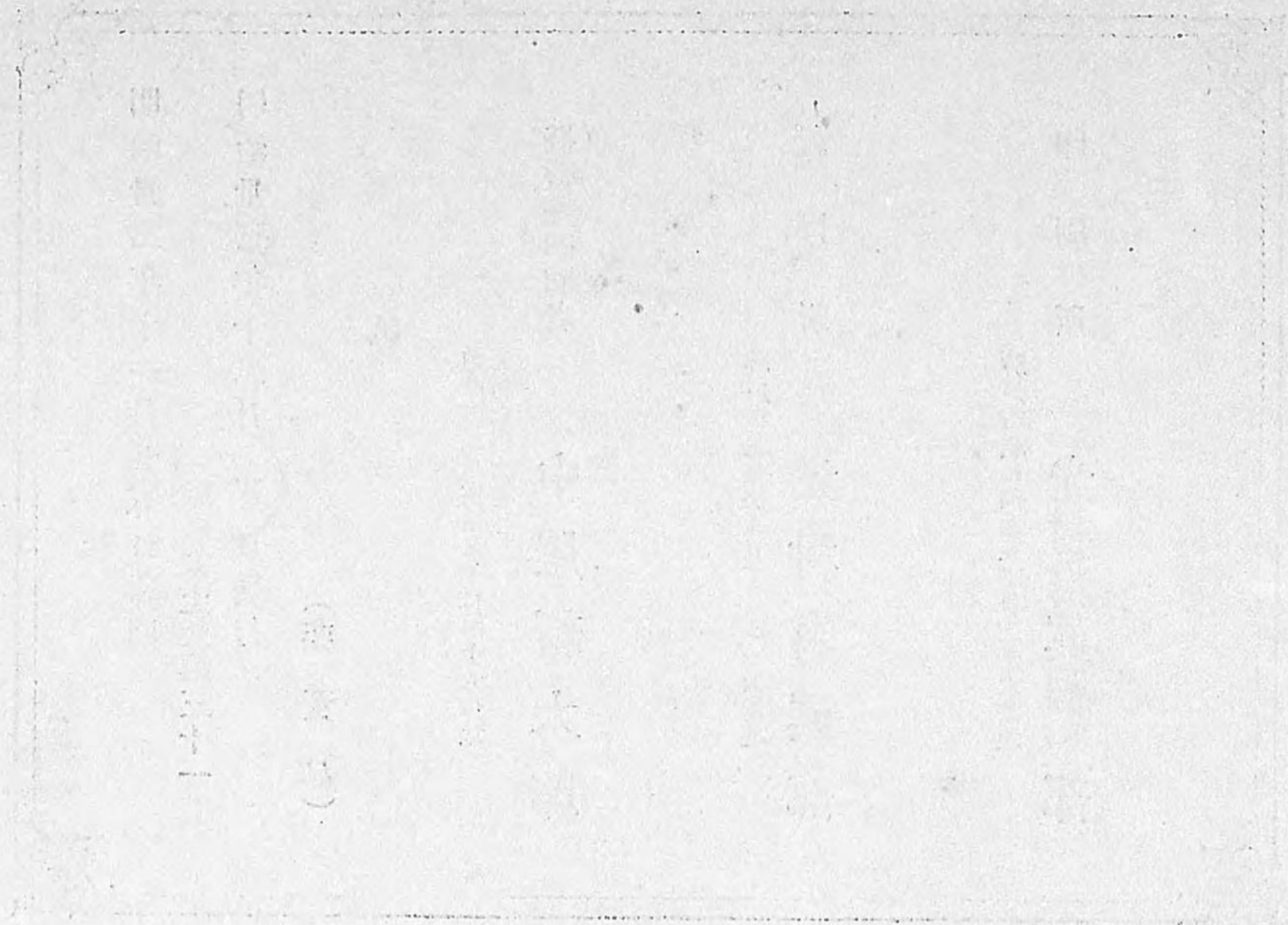
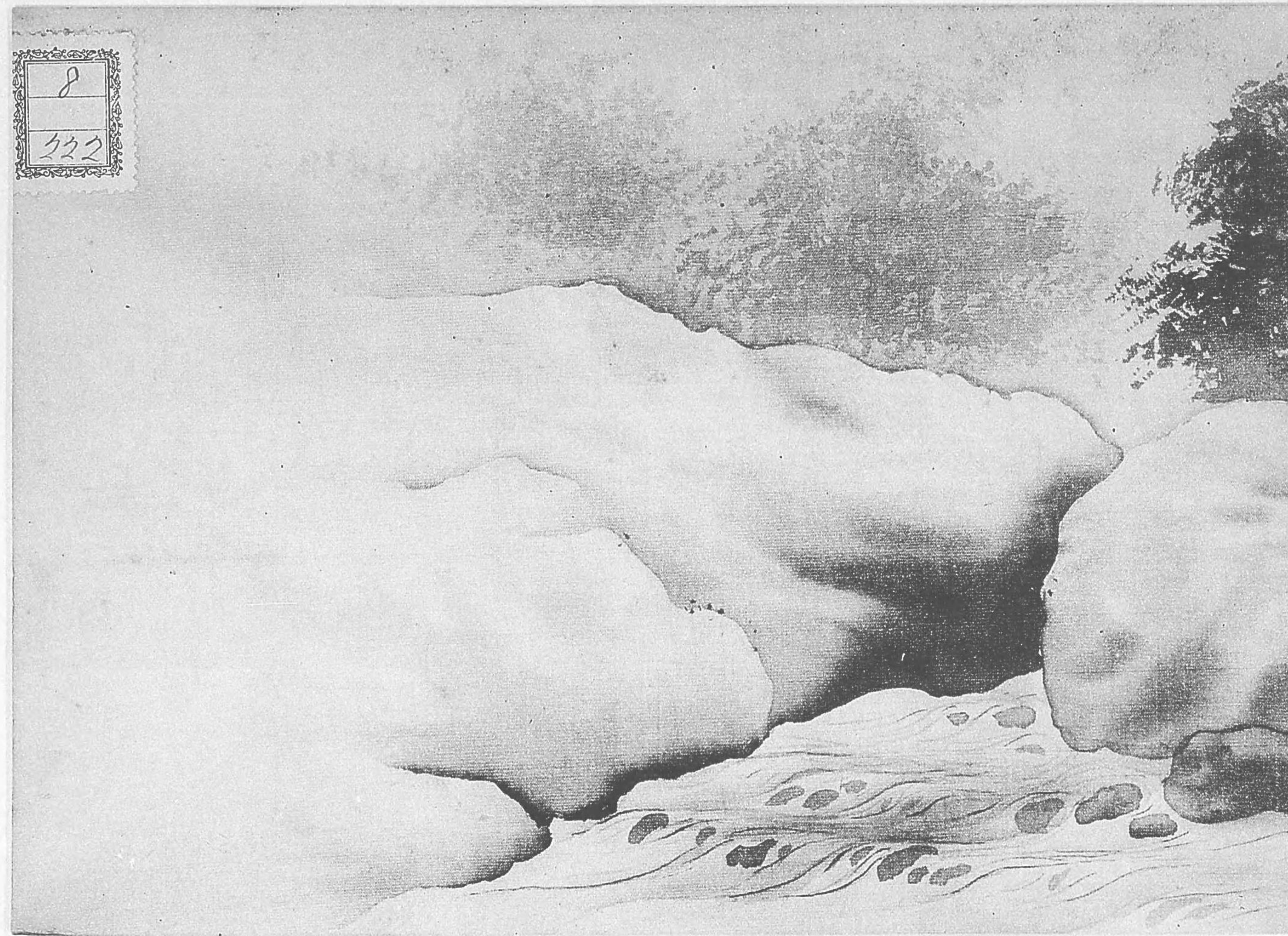
發行所
光村寫眞部

神戸市北長狭通五丁目四十六番地

印刷所
光村寫眞製版部

神戸市北長狭通五丁目四十六番地

8
322



8
522



終